



作家桐野龍一氏の元婚約者  
Kさんへの単独インタ  
ビュー

---



ヤマダヒフミ

我が国を代表する著名な作家、桐野龍一氏が亡くなって二十年が経った。桐野氏は幻想的な作風と、孤独や寂寥をテーマとした小説を多く残し、その作品は世界中で親しまれて読まれている。桐野氏の作品は彼の死後、彼の友人が編纂し、自費出版したのが桐野氏の作品が世で評価されるきっかけとなった。

本号では、特別に桐野氏の元婚約者のインタビューを掲載する。元婚約者Kさんは、桐野氏との数年の交際を経た後に、桐野氏と婚約破棄するに至った。そしてその後、桐野氏との交際は途絶えた。しかし桐野氏はその後もK氏の事が忘れられなかった事が、日記等の解読によって判明している。ちなみに桐野氏は、Kさんと別れてから一年後に病死した。また、Kさんはその四年後に、大手食品会社に務めるY氏と結婚、今は三人の子を持つ母親である。

――このたびはインタビューをお受けいただきありがとうございます。よろしくお願いします。

「よろしくお願いします」

――まず、単刀直入にお聞きしますが、このたび、これまで沈黙を守ってこられたKさんがインタビューをお受けになった、その心境の変化というのはどのようなものだったのでしょうか？

「心境の変化、ですか。…桐野が亡くなってからもう二十年も経ったという事もあって、私もそろそろ彼の事を話してもいいのではないか、と思ったという事です。一番はそれです。それともう一つはメディアを通じて、桐野に対する誤った印象が広がっているのを少しでも改善したいと思ったためです」

――誤った印象とは具体的に、どのようなものでしょうか？

「それはもちろん、はっきりしています。メディア上においては桐野は、とんでもない聖人だったように書かれるか、それとも逆に、実に冷酷で極悪にところもあったなどと、白黒どちらかはっきりするように書かれています。もちろん、その方が一般受けするのかもしれませんが。私の知る限り、桐野は普通の人と同じように、些細な事に苦しんだり、いらいらして八つ当たりしたりもする、普通の人間でした。彼は普通の人間として生きていたのであって、今の研究者達が持ち上げたり、貶めたりしているようなそんな人ではありませんでした。彼は普通の人で、変なところ、間違ったところも概してありましたが、しかし優しいところ、強いところもたくさん持ち合わせている人でした。でも、確かに、彼の中には、人とは違う部分もありました。桐野はいつも、自分と闘っているような人でした。普通の人にとってなんでもないような事、気にも留めないような事を気にして、それで一人苦悩して、苦しんでしまうのです。そしてその苦しみと

の葛藤がそのまま、作品の中に反映されたのだと思います」

——確かに、桐野氏は世界的な作家なので、それに見合ったイメージがメディアを中心に構築されてしまっているような印象がありますね。もっとも有名な作品は、「非存在を目指して」ですが、それらの作品、あるいは執筆に関して桐野氏があなたに何か言った事はありましたか？。

「桐野は小説を書く事が好きでした。多分、毎日書いていたと思います。でも、私にはそれほど見せたりはしてくれませんでした。でも、時々、自信作——自分で『よし！』と思ったものは私にメールで送ったりしてきました。私はそれに対して肯定的な感想を送りましたが、否定的な事は一切言いませんでした。もし私が、文学に詳しく、彼に色々アドバイスするタイプの女性だったら、あんな風に何年も付き合う事はできなかったと思います。彼は一人で色々やりたかったので」

——Kさんは桐野氏の作品についてどう思っていましたか？

「正直に言って、彼の作品についてはよく分かりませんでした。今もよく分かりません。桐野が今、世界的な作家だという事も、私の中では全然ピンと来ていません。でも、彼は終始苦しんでいましたので、その吐き出し口として、小説が役に立っているなら、それで良いと思っていました。とにかく、桐野には優しく感じやすい所があって、私達は誰も責めていないのに、桐野はいつも、自分は何か欠けている存在だと自分の事を思っていたようです。だから、私はそんな彼の肩の力を抜くように、抜いてあげるようにいつも気をつけていました。でも、それも焼け石に水でした」

——桐野氏は一体、何にそんなに苦しんでいたんでしょう？

「わかりません。それが桐野の最大の謎だと思います。...でも、多分、彼は自分自身である事に悩んでいたんだと思います。彼はよく言っていました。『生きていく事は嘘をつく事、インチキをする事だ。この世界で何者かであるという事は常に、他人をだまして蹴飛ばして、そして自分の席を確保する、そういう行為だ。でも、僕にはそんな事は耐えられない。他人の幸福を蹴り飛ばしてまで自分が幸せになりたいとは思わない』 彼はよくそう言っていました。そして、私に対しても『僕はお前と結婚したいのだけど、それができない。お前の事は愛している。心から。でも、お前は僕の事を愛していない——いいや、違うな。僕がお前の事を愛していないんだ。でも、愛するというのはなんて辛いんだろう！』 桐野は気持ちが激した時には、そんな事を言いました。でも普段はおとなしくて優しい人でした」

――なるほど。桐野氏は複雑な内面を持っていたんですね。でも、Kさんと桐野氏は、××年に一度婚約をして、その三ヶ月後に婚約破棄されていますが。

「ええ。あの時は私は――嬉しく思いました。いつも煮え切らない桐野にしては、思い切ったものだ。桐野は私と婚約する、と言いました。『結婚して幸せになろう』とも言ってくれました。親に挨拶する、とも言ってくれました。私はその言葉を信じました。私はあの時は心底、嬉しい気持ちでいました。まるで天国にいるかのような嬉しさでした。でも、それは結局、あの人の本心ではなかったんです。そうです。――いいえ、あるいは、彼は私と結婚して、そして平穏な家庭を作る事を望んでいたのかもしれませんが。でも、桐野の中には、それを拒む何かがあって、結局、桐野はそれを越えられなかったのだと、そう思います。桐野は私と婚約した後に、どんどんと暗くなっていきました。彼は深く懊悩し、そして私がメールを送っても、返事をくれなかったりしました。そしてある時、急に、婚約破棄を切りだされたのです」

――急にそんな事をされてショックではありませんでしたか？

「もちろん、ショックでした。でも、それと同時に、とても安堵して、納得する所もありました。『ああ、あの人にはやっぱり無理だったんだ』って。もちろん、それは悪い意味ではありません、桐野はいつも、自分と葛藤して、闘っている人だったので、彼はそのもう一人の自分を乗り越えようとして、そして、結局は乗り越えられなかったんだ。あの人のお父さんは厳格な人でした。そしてお母さんは、物静かで気弱い人でした。桐野は、自分の家族に自分は深く傷つけられていたと考えていたようです。だから、自分が家族を作る事は、また、自分のような子供を生んでしまうのではないかと、その事を恐れていたようです。そういう事を何度か言っていました」

――桐野氏とお父さんとの確執は今では有名になっています。その事はどう思われますか？

「確執はあったと思います。でも、桐野のお父さんも、一度会った事がありますが、全然悪い人だとは思いませんでした。でも、少し厳格すぎる所はあったと感じましたが。桐野と、お父さんとはまるで逆のタイプの人でした。桐野は繊細で詩人氣質で、お父さんは逆に頑健で、生活に向かっていくタイプでした。二人の溝は最後まで埋まらなかったと思います」

――Kさんは桐野氏が亡くなったのを、後で知人から知らされたそうですが、その時、どうお感じになりましたか？

「どうっ、て?...。(しばし絶句) しばらく何も考えられませんでした。でも、桐野にとって生きる事はあまりにも辛くて苦痛な事だったので、やっとこの世界という束縛から解き放たれたのかな、と後になってそう思いました。彼が亡くなった直後はしばらくショックで、何も手に付かないような状況でした」

―――ですが、桐野氏とは婚約破棄して、もう絶縁状態になった後だったのでは？

「確かにそうですが、彼の事は私の心に残っていました。私は最初、桐野は普通の人だと言いましたが、それは嘘かもしれません。あの人は繊細で優しすぎる所があって、それから身分の違いとか、社会的なポジションの違いとか、そういうものを憎んでいました。だから誰に対しても優しく丁寧でした。桐野が話していたことですが、高校生の時に、彼は剣道部でした。その時、その高校の剣道部では、一年生が拭き掃除をする事に決まっていたんですが、上級生になっても彼は、いつも一年生に混じってそれをやっていたそうです。最初は皆に止められたけど、その内、誰もなんとも言わなくなったそうです。桐野はそういう人でした」

―――なるほど。別れた後も、二人は互いに相手の事が心に残っていたんですね。しかし、Kさんは四年後に、Y氏と結婚されました。

「ええ。これは偽善と思われるなら、それでもいいですけど、しかし人はいつまでも悲しみの中にはいられないものですし、継続して生きていかなくてならないのだと思います。Yと出会ったのは私の出張先の事でしたが、彼もまた優しい人でした。そして、Yと会った時、ふと、私は桐野が生前に言っていた事を思い出したのです。『僕は多分、あと何年かしか生きられないだろうけど、君はまだその先も生き残るだろう。君はその時、自分を綺麗な、何かしら、「一人の人間を愛した女」みたいな、そんな世間のイメージにとらわれてはいけないと思う。君はそういう方向に行くタイプだからね。君は僕が消えた後、幸せにならなければならない。幸せになる事も、一部の人にとっては試練だ。特に、君や僕のようなタイプにはね。もちろん、すぐに幸せになろうとする不幸な人々もたくさんいるけれど』 私はその言葉を聞いた時は(交際中だったので)、すぐに彼の言葉を打ち消す事を言いました。『あと何年かしか生きられないなんて、そんな事は言わないで欲しい。そんな事はあるわけがない』―――でも、あの時、桐野は自分の運命についてよくわかっていたんでしょね。それで、私にあんな事を言ったのでしょ。私はYと出会った時にその言葉を思い出しました。だから、その後、私はYとの結婚を決断しました。幸せになるという事はよくわからない、人生の試練のようなもの。―――確かに、私は悲しみの中にいるのが好きな女でしたから」

―――なるほど。よくわかりました。今日聞いたお話で、桐野龍一氏の事が、以前よりも大変はっきり見えるようになった気がします。では、最後に、桐野氏の作品の愛読者に何かメッセージのようなものはおありでしょうか？

「そう言われましても…。実は私達、実際の桐野を知っている人達は、今、桐野の作品がこうして広く読まれている事にとっても困惑しているんです。とても。最近でも、私は書店で桐野の書いた作品を手にとってみた事がありますが、そこに書かれた作品とかそれに捧げられた賛辞などは、私の知っている桐野とはどうしても結びつきませんでした。そこに書かれたものは、誰か別の違う人へ向けられたもの、あるいは誰か別の人が書いたもののような気がしてならないのです。世界中に沢山愛読者がいる事は知っていますが、しかし私はその方達に何も言ってあげる事はできません。何故って、私には、桐野の作品がどれほど人類史上高い価値を持っているとか宣伝されても、現実の彼との思い出の方が大切だからです。私にとっては――あくまで私にとっては、彼の作品全部を合わせたよりも、彼との思い出、現実の桐野龍一という人物の方がはるかに大切なんです。桐野はある時、夏場に公園に二人で遊びに行きました所、こう言っていました。『なあ、K。この世界には本当に色々な人がいるね。この世界にはさ、色々苦しんだり、悩んだり、辛い思いをしたりしている人達がいる。…僕達は今こうして二人で、幸福そうにしているけれど。でもね、そういう僕達ってというのは、まるでテーブルから汚いものでも払いのけるかのように、苦しんだり辛かったりしている人達の事を除け者にして生きている。そうやって払いのける事で、自分達の幸福を維持しようとしている。でも、そういう事はいつまでも続かないんじゃないかな？ ほら、あそこで子供が逆上がりをしている。あれは、どういう事だろうね？ 一体？ 誰かが逆上がりの方法を教えてやるべきなのか、それともあの子が一人でそれを学ぶべきなのか？ 僕の親父なら『こうやるんだ。そうすればできる』『どうしてできないんだ！』って怒鳴りつけるだろう。でもね、本当にそうだろうか。あの子は今、一人で練習している。何かを得ようとしている。でも、そういう自然な成長とか、何かを求める心のあり方というのを、人はあんまり見ようとはしない。でも、僕はそういう事が大切だと思うんだよ。生きる事は条件で決まるんじゃないく、何かのハードルがあって、それを乗り越える事に意味がある。でも、僕の親父だったら、子供の僕をだっこしてハードルをまたいで、「さあ、ほら、できたぞ」って言う。でも、やっぱり人生は自分の足で歩かなきゃいけない。そうじゃないのかな」 あの子はよくそんな事を言っていました。あの子には色々な事が見えていました。他人の苦しみを自分のように感じる能力がありました。私は桐野の作品についてはよく分かりません。ただ私の心には現実の桐野の姿がはっきりと残っているだけです。大切な思い出として。彼の事に関しては、それだけです。それ以上、私に言える事はありません」

――どうも、長時間のインタビューありがとうございました。今日はここでおしまいにしたいと思います。貴重なお話、大変ありがとうございました。これで読者の方も桐野氏がどんな方なのか、その理解が深まったと思います。ありがとうございました。

「ありがとうございました。」